

聖書：マルコの福音書 1：9～13

説教題：あなたはわたしの愛する子

日時：2025年5月4日（朝拝）

マルコの福音書の2回目となります。前回の箇所では旧約の預言に従って、まずメシアの先駆者が現れました。バプテスマのヨハネが荒野に現れて悔い改めのバプテスマを説き、7～8節でこう述べ伝えました。「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります。」このヨハネの紹介に続いてさっそく今日の箇所からイエス様が登場します。しかしその登場の仕方は私たちの期待と大きく異なるのではないのでしょうか。イエス様は「ガリラヤのナザレからやって来た」と記されます。一言で言えばド田舎です。誰も注目しない村です。何かそこから良いものが出るだろうかと思われるような地方からです。ここに神の働きは人間の思いや期待と異なるところから現れるということをおぼわされます。イエス様はイスラエルの都エルサレムから出たのではありませんでした。有名なラビの門下生でもありませんでした。その登場に当たってラッパは吹き鳴らされておらず、イエス様は威厳を示しながら現れたのではありませんでした。むしろ目立たない仕方で、ヨハネのもとに来る多くの人々と区別がつかないような一人として現れたのです。そのようなへりくだりの内に約束のメシアは来られたのです。イエス様はこの時、およそ30歳であったと平行記事のルカの福音書3章23節に記されています。それまでのことは何もここで語られていません。ですから人々に注目されない田舎での約30年間の生活がすでにあつたのです。そのような誰も注目していない田舎での数十年の準備がなされた上で、静かに、目立たない仕方でイエス様は現れたのです。

そのイエス様はヨハネからバプテスマを受けられました。マルコはさらりと書いて何の説明も加えていませんので、あまり多くを語るべきではないと思いますが、これは驚くべき行為だったのではないのでしょうか。ヨハネが伝えていたのは悔い改めのバプテスマでした。罪のないイエス様にとって本来これは受ける必要のないものだったはずですが。またヨハネは「私の後に来られるのは私よりも力のある方である」と言っていました。その力ある方がヨハネにバプテスマを授けるのではなく、反対にヨハネからバプテスマを受けるとはどういうことでしょうか。他の福音書を見るとヨハネは

「私こそ、あなたからバプテスマを受ける必要があるのに」と言って抵抗したことが記されていますが、イエス様は「今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです」と言われました。結論から言えばイエス様は個人としては罪がないお方ですから洗礼を受ける必要はありませんでした。しかしイエス様はご自分をイスラエル、神の民と一つに結び付けておられたので、そのような方としていわばこの国民的義務に従うのはふさわしいと仰ったのです。こうしてイエス様はこの洗礼によって罪ある私たちと同じ立場に立ってくださったのです。

マルコは以上のことは詳しく書いていません。彼が強調しているのはその後のことです。イエス様が洗礼を受けた時、三つの不思議なことが起こりました。まず起こったことは天が裂けたことでした。参考になる箇所としてイザヤ書 64 章 1 節に次のようにあります。「ああ、あなたが天を裂いて降りて来られると、山々はあなたの御前で揺れ動きます。」 天とは神がおられるところです。その天が裂けたとは天と地の間にあった障壁が破られたということです。それまでは神がおられる天との間に直接的な交通はありませんでした。しかし天が裂けたということは、そこから神が出て来られる、神と地上の交通が生じるということになります。ですからこれはイエス様において天との交わりの道が開かれたことを意味していると思われまます。

二つ目に聖霊が鳩のようにイエス様に下って来られました。「鳩のように」とは大人しく、静かにというイメージでしょう。鷲や隼のように急降下して来たのではありません。穏やかに、優しく舞い降りるかのようにイエス様に臨みました。参考になるのは創世記 1 章 2 節です。天地創造の際、神の霊が「水の面を動いていた」と記されていますが、「動いていた」という部分には印がついていて欄外に「舞いかけていた」という訳が示されています。まさにあの時の聖霊のわざを彷彿とさせるものです。再び新しい創造のわざをここでなさるかのようにです。

そしてもう一つ天からの声がありました。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」 これは父なる神の声と言えます。これは旧約の二つあるいは三つの言葉を背景としたものと思われまます。その一つは詩篇 2 篇 7 節です。「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」 これは神によって立てられた王について歌っている詩篇です。しかしそれは単なる人間の王ではなく、やがて来られるまことの王

メシアを指す言葉でした。その詩篇の言葉がここでイエス様に向かって天から語りかけられました。その際、そこに「愛する者」という言葉が加えられています。これは創世記 22 章 2 節でアブラハムの一人子イサクを指して使われた言葉を反映するものと言われます。神はその箇所でアブラハムに「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、云々」と言われました。そのようにイエス様は神と特別な関係にある方、その一人子に相当する方であるという身分がここに証しされました。そしてもう一つは「わたしはあなたを喜ぶ」という言葉です。これはイザヤ書 42 章 1 節の「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者」という言葉を背景とするものです。ご存知の通り、このイザヤ書が描くしもべは「仕えるしもべ」であり、服従、謙遜、そして苦難で特徴づけられるしもべです。ここに「まことの王・神の子」という輝かしい身分と「苦難のしもべ」という互いに相反するような身分がドッキングされています。イエス様は約束されて来たまことの王メシアまた神が愛する特別な一人子なのに、神の御心に従って苦難の道を進み、犠牲を払う者となる。これは言うまでもなく、イエス様がこの後、私たちの身代わりとして十字架の死にまでも赴くことを指しています。一体自分の愛する子がこのような苦難の道を進むことを喜ぶと語る親はいるのでしょうか。しかし父なる神は「わたしは喜ぶ」と言われました。なぜでしょう。それは父なる神がご自身の側でどんなに大きな犠牲を払おうとも、私たち罪人の救いを心にかけて、そのためにご自身のすべてをささげておられるからに他なりません。

すでにお気づきの通り、ここには三位一体の神、すなわち父なる神、子なる神キリスト、聖霊なる神が登場しています。三位一体の神は他の何物をも必要とせず、それ自身で完全な交わりの内にあり、ご自身の内に充足しておられます。ですから他のことなど気に留めず、ただご自身の内で満ち足りていれば良いはずですが。しかし神は私たちの救いのために大切な一人子をこの世に遣わし、今その御心に従って十字架の道を進もうとする御子を見て「わたしは喜ぶ」と言われました。また使命を遂行するために御霊も豊かに下って力を与えて行かれます。私たちがここに見るのは、私たちのような罪人の救いのために、ここまで献身してくださっている三位一体の神のお姿です。なぜ神はそこまでされるのでしょうか。それは三位一体の神の完全な交わりと喜びに私たちをも加えてくださるためです。その祝福へと引き入れるためです。そのためにこのように働いておられる神のお姿がここにあるのです。

さて洗礼を受けてご自身を私たちと一つに結び付けられたイエス様は荒野へ進まれました。「それからすぐに」という言葉はマルコの福音書に多く出て来る特徴的な言葉です。しもべは次々に働く者です。洗礼の時に現された栄光に浸っている暇はありません。御霊がイエス様を荒野に追いやったとあります。そして 40 日間イエス様はサタンの試みあるいは誘惑を受けられました。これとセットで考えるべきは創世記 3 章に記されている最初の人間の墮落です。あそこで最初の人間アダムとエバはサタンの誘惑に負けました。これが今の世界のすべてのわざわいの根本にあることです。ですからイエス様は御霊に導かれて第一の敵サタンとの戦いへとまず赴かれたのです。いわば第二のアダムとしてです。サタンに打ち勝って人類に救いの新しい始まりを与えるためにです。しかし最初の人間アダムの時とは条件が大いに異なっていました。あの最初のテストはエデンの園、楽園で行われました。それに対して今回イエス様が試みを受けたのは荒野です。これは楽園の反対であり、神の祝福が失われたこの世を象徴する場です。そこは呪われた地であり、サタンの支配下にあります。そこにイエス様は 40 日間いました。これはかつてイスラエルが 40 年間荒野で試みを受けたことに対応していると思われます。イエス様はそこで試されました。最初の人間アダムのようにサタンの誘惑に屈して神への愛と従順を捨てるのか、それとも人類に新しい始まりを与える方としてサタンに打ち勝つのか。

「野の獣とともにおられ」とある部分は荒野の厳しい状況、危険な状況を表現したものと思われます。旧約聖書を見ると、たとえばイザヤ書 13 章 19～22 節に神のさばきの結果として「荒野の獣が伏し、云々」とあります。またエゼキエル書 34 章 5 節でも、まことの羊飼いがいない結果、羊は「あらゆる野の獣の餌食となった」とあります。つまり荒野における野の獣はいつでもイエス様を襲いかねない存在です。サタンの同盟者です。そんな中でもイエス様はあの獅子の穴に投げ込まれたダニエルのように守られました。そしてここでも「御使いたちが仕えていた」と書かれています。詩篇 91 篇 11 節：「主があなたのために御使いたちに命じてあなたのすべての道であなを守られるからである。」 このサタンとの戦いでどっちが勝ったかということはここでは言われていません。それはこれは最初の第一ラウンドに過ぎないからです。厳しい戦いがこの後イエス様の地上の生涯全般にわたって続きます。しかしイエス様はアダムと違ってここで負けてはいませんでした。まずはこの最初のテストに合格した方として、この後の歩みへと進んで行かれるのです。

今日の箇所はこうして来週から見るイエス様の公の生涯への準備に当たる部分です。今日見て来たことは、イエス様はへりくだった方として田舎における数十年の歩みを経た上、目立たない仕方で登場されたこと、神はそのように人の思いとは異なるところで準備し働いておられたこと、また洗礼によってイエス様はご自身と私たちを結び付けてくださったこと、その洗礼に三位一体の神の働きが伴ったこと、そしてイエス様は私たちを救うメシアとして荒野でサタンと第一回目の戦いをされたことです。私たちはこのイエス様のへりくだりに感謝したいと思います。また三位一体の神の献身のお姿に感謝したいと思います。またイエス様がまずサタンとの戦いへ進んでくださったことを感謝したいと思います。これからはお見て行くこととなりますが、こうしてイエス様がついにサタンに打ち勝ってくださったからこそ私たちに救いは与えられます。ヨハネの手紙第一 3 章 8 節に「悪魔のわざを打ち破るために、神の御子が現れました」とあります。イエス様はまずこの悪魔との戦いへ直行し、ついに勝利を得てくださいます。ですから私たちは今やどんな中にあっても恐れなくて良いのです。まだ天国に入っていない者たちとして、なおこの世にある者たちとして、私たちが荒野のようなところ、寂しい場所、危険な状況に置かれることがあるかもしれません。しかしイエス様はその支配者をすでに滅ぼしてくださいましたから私たちは恐れる必要がないのです。たとえ自分が人生の荒野にあるとしても私たちは御子に信頼し、御子が勝ち取ってくださった救いに生かされることができます。

そしてサタンの支配から解放された私たちはどこへ行くのでしょうか。その私たちが迎え入れられるのは三位一体の神との交わりです。神はご自身の豊かな交わりと喜びに私たちを迎え入れるために私たちを救ってくださいました。そして何と聖書は私たちはイエス様と結ばれて、神の家族の養子として、イエス様と同じ神の子の身分に引き入れられると語っています。ヨハネの福音書 17 章 23 節に記されている十字架前夜のイエス様の祈りの中には驚くべき次のような言葉があります。「また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。」 何と父なる神がイエス様を愛しておられるのと同じ愛で神はイエス様に結ばれた者たちをも愛しておられるとあります。今日のイエス様への天からの声、「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」はイエス様に対する父なる神からの言葉です。しかしそれはイエス様にあって、イエス様に結ばれた者たちにも語りかけられる言葉となるのです。このイエス様を信じ、イエス様により頼む者たちも、ことあるごとにこの天からの声を聞いて歩む者たちとされるのです。この神の愛の交わり

りと喜びの中に生かされる者たちへ導かれて行きたいと思います。